

京都大学	博士(文学)	氏名	山本圭一郎
論文題目	J・S・ミルの実践哲学：実践の論理と倫理		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>本論文は、J・S・ミルの実践哲学の方法である「実践の論理」に着目しながら、彼の実践哲学の全貌を可能なかぎり正確に描き出すことを主題とする。ミルの実践哲学は往々にしてJ・ベンタムの功利主義と一括りに捉えられるか、あるいは別々に捉えられるとしても「満足した愚か者よりは不満足なソクラテスであるほうがよい」という文言に見られる「快樂説」をめぐる両者間の異同のみが注視される傾向にある。しかしながら、『功利主義論』だけで見受けられる「快樂の質」の議論は、両者の相違点の氷山の一角に過ぎない。実はその水面下の相違点こそが重要なのであって、それが実践哲学の方法の違いなのである。ミルの実践哲学の方法とは、人間の行為にとって望ましい目的を設定する「アート (Art)」と、かかる目的を達成するための手段を提供する「モラル・サイエンス (Moral Sciences)」から成る「実践の論理」である。</p> <p>実践の論理に注意を向ける研究はこれまでもあったが、アートだけでなくモラル・サイエンスをも視野に入れ、ベンタム流の実践哲学の方法との相違点を調べ、ミルの実践哲学の方法の独自性を検討した倫理学研究は皆無に等しい。一つには、従来の研究がいわゆる「功利主義」を念頭に置いてミルの実践哲学を十分に検討することなく、彼のリベラルな政治哲学だけを剔出して論じたり、「質的快樂説」「行為功利主義・規則功利主義」といった既存の問題設定ばかりに注意を払ったりしているためである。</p> <p>以上のような問題意識のもと、本論文の第1章から第3章では、ミルがベンタムの実践哲学の方法のうちどの点を継承し、またどの点でそれから差異化を図ろうとしたのかを明らかにする。第1章では、「ベンタムの哲学に関する所見」や「ベンタム論」をはじめとして、ミルが主に1830年代に展開した一連のベンタム批判を考察する。かかる批判を丁寧に調べると、ミルがベンタムの実践哲学の一面性を鋭く指摘し、実践哲学が行為の外面的な規制をあつかう政治哲学だけでなく、行為者の性格や徳性をあつかう道徳哲学をも包含する必要性を説いたことが分かる。その一方で、相違点ばかりに注視することで両者間の一致点を蔑ろにすることも避けなければならない。こうした作業を通じて、ミルがベンタム学派の問題点を指摘しつつも、その実践哲学の第一原理である「功利性の原理」と「経験的方法」を基本的には継承した点を確認する。</p> <p>第2章では、『論理学体系』にて提示された「実践の論理」を取り上げ、実践の論理が「アート」と「モラル・サイエンス」から成る実践哲学の方法である点を解明する。そして、実践の論理のうち「アート」に焦点を絞って検討を行い、アートの設定する究極目的が「幸福の増進」であり、この点でミルがベンタムの「功利性の原理」を基</p>			

本的に受け継いだことを確認する。他方、アートの特徴をよく検討すれば、そこでもミルがベンタム流の実践哲学から差異化を図ろうとした形跡が見られる。つまり、ミルのいうアートには「複数性」と「階層性」という特徴が見受けられる。アートの複数性とは、たとえば医学のアートや建築のアートなどのように、アートの各分野が複数ありうることを指す。そして、アートの階層性は、諸々のアートの目的が衝突する際に、上位階層にあるアートがその衝突を調停する場合に見られる。この上位階層にあるアートが「アート・オブ・ライフ」である。アート・オブ・ライフとは、ミルが差し当たり掲げる主要なアートの三分野であり、それらは「正・不正」「便宜性」「有徳性」という評価に関わるアートである。

続く第3章では、『論理学体系』を中心として実践の論理のもう一つの構成要素である「モラル・サイエンス」を考察する。モラル・サイエンスという点にかぎって言えば、ベンタムもミルも、モラルに関わる問題に「経験と観察」に基づいた「経験的方法」を導入しようとしたD・ヒュームに代表されるイギリス経験論の系譜に属する。ミルはベンタム流の「経験的方法」を継承する一方で、その具体的内容には意義を唱えた。ミルのいうモラル・サイエンスは、彼の科学の方法論を踏襲しているため、まずはミルの経験論にもとづく自然科学の主要な方法論を概観し、彼の方法論においては演繹的推論と帰納的推論は対立するものではなく、前者は広義の后者に含まれる点を確認する。次に、モラル・サイエンスの特徴と方法を考察し、ミルがベンタム流の「経験的方法」からどのように差異化を図ったのかを検討する。モラル・サイエンスは自然科学があつかう全称命題とは異なり、「大多数のAはBである」という近似的一般化を行い、確率的命題をあつかう。そして、モラル・サイエンスが研究対象とするのは、心理学（人間本性の科学）における法則と、その法則に依拠する範囲内の社会現象である。ミルによれば、ベンタムは抽象的・単一的な法則（命題・動機）を前提に置き、それを幾何学の定理の如く扱うことで、ある社会状況下で起こりうる反作用を捨象して推論を行なう「幾何学的方法（抽象的方法）」を採用した。ミルは幾何学的方法を斥け、代わりに「物理学的方法（と歴史的方法）」を採用する。物理学的方法（具体的演繹法）では、ある状況下で影響をおよぼしうる諸々の法則（命題・動機）をできる限り特定化し、これらの法則が合成した場合にどのような結果が生じるのかを推論することになる。以上の考察を通じて、ミルのモラル・サイエンスの方法がベンタム学派から受け継いだ「経験的方法」の修正版であることを指摘する。

第1章から第3章の考察を通じて、ミルがベンタム流の実践哲学から意識的に差異化を図った点として、アートの「複数性」と「階層性」、さらにモラル・サイエンスの「物理学的方法（と歴史的方法）」を挙げる。続く第4章と第5章では、これらの点が『功利主義論』をはじめとした著作で見られる諸々の議論とどのように連関しているのかを検討する。

第4章では、アートとモラル・サイエンスから成る実践の論理が、ミル自身の実践哲

学をめぐる諸議論とどう関係しているのかを調べる。そして、アートの複数性と物理学的方法が実践哲学に関わる諸議論に深く関係している点を指摘する。具体的にいえば、幸福内容（目的）の複数性はアートの複数性と直結するだけでなく、複数の命題（法則・動機）がある社会状況下で複合して作用する場合を研究する物理学的方法にも連結している点を指摘する。さらに、こうしたアートとモラル・サイエンスの共同作業を通じて、実践の論理において道德規則（二次的原理・媒介的原理）がいかにして検証され確立されるのかを検討する。

残る第5章では、アートの階層性を具体化するために、アート・オブ・ライフの各分野（領域）における「境界線」を検討し、アート・オブ・ライフが「義務の領域」「徳の領域」「私的利害の領域」を含むことを明らかにする。そして、「義務（正）の優越性」のため、アート・オブ・ライフのなかでも「義務の領域」が優先されることを『自由論』をはじめとした諸々の著作から確認する。そのうえ、ともすれば従来の研究では看過されがちであったアート・オブ・ライフにおける「連続性」に焦点をあて、ミルの実践哲学には政治哲学（義務の領域）と道德哲学（徳の領域）が含まれること、両者間には「境界線」だけでなく「連続性」も見られる点を指摘する。ミルの実践哲学においては「徳」と「義務」は必ずしも齟齬をきたすわけではなく、たとえば有徳な人物は義務を尊重する性格特性をもつと説明しうるように、道德的ないし倫理的行為者という視点からいえば、両者の間には連続性が見られるのである。そして、ミルはとりわけこの「連続性」を重要視した。また、従来の倫理学研究でしばしば主張されてきたミルの実践哲学における「徳倫理」が、現代の代表的な徳倫理とは異なりうる点も指摘する。

以上のように、本論文は、ミルがベンタム流の実践哲学のうちどの点を継承し、またどの点でそれから差異化を図ろうとしたのかを明確し、ミル独自の実践哲学の方法（実践の論理）を構成するアートとモラル・サイエンスを考察したのち、かかる実践の論理を軸にして彼の実践哲学の全貌を描き出すことを目指す。その結果、主として以下の二点が明らかになる。

第一に、快樂説をめぐる相違点は別にして、ミルの実践哲学はともすればベンタム流の功利主義と一括りにされがちであるが、物理学的方法をはじめとして、モラル・サイエンスの方法に含まれる歴史研究や歴史的方法を考慮しても分かるように、ミルの実践哲学では経験論がいっそう色濃く現れている。ミルは功利性の原理が究極目的として掲げる「幸福」の具体的内容について、いわばゼロからのスタートではなく、人類が歴史を通じて培ってきた経験（命題）を利用できることを力説し、時代を経ることで確実性が高められた一般化（たとえば人間は安全性の利益を最重要視する傾向にあるといった心理学の法則）をもって別の近似的一般化を検証し是正すればよいと考えていた。このように、少なくともミルにおいては、功利主義的な思考を採用する者が誰であれ、どのようなものが幸福の増進に資するのかを今から弾き出すとは必ず

しも想定されていない。むしろミルは、歴史を通じて蓄積された人類の経験なしでは「功利計算」が困難を極めるとさえ考えていたようにも思われる。この点が如実に現れているのは、ミルにおいては功利主義が実践の論理における二次的原理（媒介的原理・中間原理）なしではその目的を達成できないこと、この点で彼の実践哲学が社会制度として受け入れられてきた「完全責務」や「不完全責務」を採り入れていること、そして、複数ありうる正義の規則が互いに衝突してはじめて第一原理である功利性の原理を直接的に参照する必要性が生じることである。

第二に、ミルはアート・オブ・ライフにおいて「義務（正）の優越性」を唱え、法による処罰や世論による非難といった強制をともなう「義務の領域」から峻別されるべき領域の一つとして「徳（有徳性）の領域」を挙げる一方で、「義務（正）」の言語だけを語るわけでもなかった。これは彼がベントム流の実践哲学を「一面的」であると批判したことに重なる。アート・オブ・ライフにも見られるアートの複数性を考慮すれば、ミルはアートを「義務」の言語（評価）に限定したわけではなく、「徳」の言語（評価）をはじめ多種多様な言語（評価）がありうると考えている。そして、ミルは外面的な行為の規制ないし強制をともなう義務（責務）の言語を超えたところで、有徳性を問題とする狭義の道徳的・倫理的言語の重要性をひととき強調する。ミルによれば、われわれは政治的言語で語ることで満足すべきではなく、「倫理」の言語でも語らなければならない。さもなければ、よく生きる術を教えてくれるはずの実践哲学は不十分とならざるをえない。ミルのいう実践の論理は政治哲学と道徳哲学のどちらにも通底しており、少なくとも両者が相俟って彼の実践哲学を形成しているのである。



(論文審査の結果の要旨)

本論文は、J. S. ミルの実践哲学の全体像を、その主要著作のほぼ全体にわたって検討することを通じて明らかにしようとするものである。意外なことに、これまで、ミルの実践哲学に関する国内外の研究は、主として『功利主義論』で展開された功利主義的倫理学に関するものと、リベラリズムの源流としての『自由論』に代表される政治哲学に関するものに大別されており、そのため、哲学者としてのミルの全体像が明確に示されることはほとんどなかったと言ってよい。具体的には、倫理学研究者の多くは、ミルを、ベンタムの功利主義を継承し、その心理的快樂主義に質的差異という視点を付け加えただけの存在と捉え、かつ現代功利主義の視点からそれを批判することに中心的な関心をおいている。また政治哲学、社会思想史の研究者たちは、現代まで続くリベラリズムに関する論争、とりわけ「積極的自由」と「消極的自由」をめぐる議論のなかにミルを位置づけることに腐心してきた。

本論は、そのようなミル研究の現状に対して、ミルの実践哲学の方法と論理という点に着目することによって、ミルの実践哲学をより体系的、統一的に解明しようとするものであり、まずこの問題意識そのものが高く評価されよう。また、この問題意識に基づいた研究の遂行にあたって、『論理学体系』という大著ではあるが、ミル研究の中心に据えられることのあまりない著作の徹底した読解を進め、とりわけそこに現れる「アート・オブ・ライフ」と「モラル・サイエンス」という概念の関係に関する骨太な議論を展開しえた点は、類書のなさということからしても画期的な業績であるといえる。

前半の三章は、ミルがベンタム流の実践哲学を意識的に継承した点と差異化をはかろうとした点を明らかにするというライトモチーフのもとに議論が進行するが、これはたんにミルとベンタムの思想史的な比較ということにとどまらず、本論後半におけるミルの実践哲学の全体像を明らかにするという目的のための道具立てを用意するという構成になっており、多くの重要な指摘がなされている。まず第一章においては、ミルがベンタムについて書き残した文章のほとんどすべてが網羅的に検討され、ここで言われる「ベンタム哲学の一面性」ということが、これ以降のミル哲学の独自性を示すものであることが確認される。これに基づき、第二章では、大著『論理学体系』において展開されたミルの実践哲学の論理が、「アート」と「モラル・サイエンス」という二つの方法によって構築されているということが確かめられた後、実践における目的設定に関わる「アート」に関する考察がなされるが、ここにおけるベンタムにはなかった「アートの複数性、階層性」に関する指摘は、最上位の「アート・オブ・ライフ」という概念への着目ともあわせて貴重なものである。第三章の、実践の論理のもうひとつの部分である「モラル・サイエンス」に関する論考は、イギリス経験論の系譜のなかにミルを位置づけるという点でも重要なものであり、同様の研究がこれまでのミル研究に欠如していたことからしても、これ自身で独立した意義を有するもの

である。まず、ミル独特の演繹推理をも部分として包含する帰納推理に関する考察に基づき、モラル・サイエンスの特徴として確率論的な近似的一般化を扱うということが確認される。ここから、単一の原理からの直接の演繹にもとづく抽象的な「幾何学的方法」を採用したベンタムに対して、複数の法則の混合した状況を扱う実践哲学においては、具体的演繹法としての「物理学的方法」がふさわしいこと、さらに、実験的方法の採用しえない実践哲学においては逆演繹法としての「歴史的方法」が重要であることが指摘される。これは、ミルの実践哲学の特質を「方法」という観点から明らかにした考察であり、ここにおけるテキストを正確に読解したうえでの粘り強い記述は、今後のミル研究に益するところ大であろう。

後半の第四章では、これまでの論考を基に、アート・オブ・ライフとモラル・サイエンスというミルの実践の論理の両輪がどのように関係するのかが問われ、第二章において指摘されたアートの複数性ということが、第三章で述べられたモラル・サイエンスにおける物理学的方法と歴史的方法ということと密接に関係しているという論者独自の解釈が展開される。これは、ベンタムから継承した「功利性原理」のミルにおける位置づけという根本的問題に関わるものでもあり、本論文の他に例のない独創性を示すものとして高く評価しうる。続く第五章では、「アートの階層性」という視点を、具体的な実践的問題へと適用することを通じて、義務と徳という二つの領域の区別と階層構造が明らかにされる。この作業を通じて、義務論的リベラリストとしてのミルと、イギリス哲学の伝統である「性格」における徳を強調する徳倫理学者としてのミルという二つのミル像が統一的に示されることになる。これは、本論を締めくくるものであると同時に、最近の国際的なミル研究の動向に新たな視点を導入するものでもある。

以上のように、本論文は、ミルの実践哲学の全体像を、その「方法」という観点から描き出そうとした重厚なものであり、扱われている文献の多さ、そしてその読解の正確さという点からしても従来のミル研究にはなかった第一級のすぐれた研究であると認定できる。論者はすでに国際的なミルに関する研究集会においても以上の知見の一部を公表しており、高く評価されている。しかしながら、不満な点がないわけではない。例えば、本論の目標とするミルの実践哲学の全体像を明らかにするという点において、「功利主義者」ミルという観点からすれば必ずしも明確な像が結ばれてはいないという問題がある。これは論者の責任というよりはミルその人に帰せられる問題であるのかもしれない。ただ、そのことを含めて、ミルの諸著作に内在的で整合的な解釈を提出しようとするあまり、既存の外在的な批判をともしれば等閑視しがちな点があるのは確かであり、価値論やメタ倫理学の領域におけるミル批判の検討も含めて論者の今後の課題となろうが、そのことは本論の独自の価値を直ちに損なうものではない。

以上審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるもの

と認められる。平成二十一年十二月二日、調査委員三名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。